

## セルフ—中—① 「生徒との接し方に悩む山田教諭」(生徒指導)

山田だいすけ教諭は新採用2年目で中3の担任をしている。山田教諭の学校では、生徒は毎朝「毎日のあゆみ」という一日の生活の記録と日記を担任に提出することになっていた。

山田教諭は昨年から生徒の日記には必ず赤ペンを入れ、おもしろい内容や考えさせられる内容があった場合には、毎日発行する学級通信で紹介するようにしていた。しかし、今年は初めて3年の担任となり、多忙な日々を送る中、6月になると、生徒の日記に入れる赤ペンの量は減ってきた。時間のとれない日にはスタンプ印を押して返すだけの時もあった。また、いつの間にか学級通信の発行回数も大幅に減ってきており、焦りも感じていた。

7月、クラスの一人の女生徒が受験に対する悩みを長い文で日記に書いてきていた。しかしその日、山田教諭は期末PTAと夏休みの三者面談についての学級通信を書くことに忙しく、日記にスタンプ印も押さずに返してしまった。その女生徒は翌日、「先生は本当に生徒のことを考えてくれているんですか」と1行書いて以来、日記を書かなくなってしまった。

隣のクラスの担任に相談したところ、「僕は赤ペンは入れないし学級通信もあまり出さないけど、毎日しっかり日記を読んでスタンプを押し、気になる子には直接話しかけてるよ。」と言う。山田教諭は、「赤ペンの量や学級通信の量を気にするのではなく、一人一人の生徒をもっと大切に見るべきだった」と反省している。

問1. 上記の事例を読んで、どのようなことに気づきましたか。様々な立場に立ち、認められるべき点と問題点の両面について意見を出し合しましょう。

問2. この事態を変えていく上で、山田教諭にできることはどんなことがあるでしょうか。また、この事態を変えていく上で、学年や学校等ができるのはどのようなことでしょうか。関係する人物や分掌、あるいは場面などを想定して、より具体的に考えてみましょう。

問3. 今回の事例を踏まえて、自校で取り組めることはどのようなことでしょうか。また、あなた自身に取り組めることはどのようなことでしょうか。

## セルフ—中—② 「同じ教科の先輩との接し方に悩む本田教諭」(教科指導)

本田まみ教諭は採用1年目、大規模校の1年部で英語を教えている。学年は6クラスあり、そのうちの4クラスを本城教諭、残りの2クラスは2年部の教職10年目のベテラン、佐藤ゆりこ教諭が担当している。

佐藤教諭からは授業の足並みをそろえるために、授業で用いるワークシートはできるだけ同じものにしようと言われていた。まだ授業に慣れていなかった4、5月は、佐藤教諭が作成するワークシートをそのまま使わせてもらうことで、ずいぶん助かっていた。

ようやく授業も軌道に乗り始めた6月、本田教諭は佐藤教諭からもらうワークシートが少しずつ物足りなくなってきた。よく練られた内容であることは確かなのだが、どちらかという文法や和訳にこだわった内容で、コミュニケーション活動を行う時間がいつも足りなくなるのである。授業でもっと自分らしさを出すことが必要なのではないかと思い始めていた。

その時、佐藤教諭がやって来て、「はい、これ次のレッスン分のワークシートよ。使い方はまた聞いてね。」と、生徒用に印刷された一束のプリントを笑顔で渡してくれた。

問1. 上記の事例を読んで、どのようなことに気づきましたか。様々な立場に立ち、認められるべき点と問題点の両面について意見を出し合ひましょう。

問2. この事態を変えていく上で、本田教諭にできることはどんなことがあるでしょうか。また、この事態を変えていく上で、学年や学校等ができるのはどのようなことでしょうか。関係する人物や分掌、あるいは場面などを想定して、より具体的に考えてみましょう。

問3. 今回の事例を踏まえて、自校で取り組めることはどのようなことでしょうか。また、あなた自身に取り組めることはどのようなことでしょうか。

## チーム—中—① 「学年で短学活の内容を揃えることの意味に悩む木村教諭」

(学級経営)

木村こうじ教諭は採用1年目で、学年3クラスの中規模校で中2の担任をしている。木村教諭の学年では前年度より朝と帰りの学活のプログラムを統一して行っていた。学年で足並みをそろえることが目的であった。

木村教諭もそのプログラムに沿って朝と帰りの学活を行っていた。朝の会は班ごとにその日の目標を確認し、帰りの会はその目標に沿った一日のふり返りを行っていた。帰りの会には、その日最も目標が守れた班、忘れ物や遅刻が少なかった班を「優秀班」として評価する時間もあった。

6月のある日、帰りの会を終えた時に生徒の一人が、「あーあ、アイツがいるかぎり優秀班なんか無理やな。」と大きな声で言うのが聞こえ、それに続けて笑い声が起きるのを聞いた。「アイツ」とは、その生徒の班のメンバーで、遅刻や忘れ物が比較的多い生徒を指していることは明白であった。

その場で「そんなことを言うものではない」と指導したが、心の中には割り切れないものが残った。「優秀班」など決めるからこのような発言を招く。だとしたら、そもそも「優秀班」を決めることに何の教育的効果があるのだろうか、と。

翌日から木村教諭は「優秀班」を決めるのを止めた。だからといって遅刻者や忘れ物が増えることもなかった。

7月のある日、隣のクラスの吉田あきら教諭から、「木村さん、この頃優秀班きめてないんだって？困るなあ、来年クラス替えがあったとき、先生のクラスの子だけ躰ができてないことになるよ。ちゃんと足並みそろえなきゃ。」と言われてしまった。

問1. 上記の事例を読んで、どのようなことに気づきましたか。様々な立場に立ち、認められるべき点と問題点の両面について意見を出し合ひましょう。

問2. この事態を変えていく上で、木村教諭にできることはどんなことがあるでしょうか。また、この事態を変えていく上で、学年や学校等ができるのはどのようなことでしょうか。関係する人物や分掌、あるいは場面などを想定して、より具体的に考えてみましょう。

問3. 今回の事例を踏まえて、自校で取り組めることはどのようなことでしょうか。また、あなた自身に取り組めることはどのようなことでしょうか。

## チーム—中—② 「生徒会担当のクラス担任のフォローに悩む佐藤教諭」(特活分野)

佐藤ゆうじ教諭は教職25年目で南区第二中学校の2年部学年主任をしている。佐藤教諭の学年には新採用2年目の田中たかし教諭がおり、昨年度は佐藤教諭が校内指導教員を務めていた。

本校では、「学校行事等の特別活動を活性化することにより、健全な人間関係を築く能力を養う」こと研究テーマとし、各学年1名の生徒会担当者を中心に学校行事の活性化に取り組んでいた。

佐藤教諭は4月、生徒からの信頼の厚い田中教諭に生徒会担当を任せることにした。校長からは、まだまだ育てるべき時期なので、しっかりとサポートするようと言われていた。

田中教諭は1学期の時から積極的に2学期の文化祭に向けての準備をし、2学期に入ると文化祭実行委員会を立ち上げて、毎日文化祭の準備に明け暮れた。そんな様子を佐藤教諭は頼もしく見ていた。

一方で、実行委員会の指導で忙しい田中教諭は自分の学級の合唱練習につけないことも多く、そんな時は佐藤教諭が田中教諭の学級の様子を見ることにしていた。

文化祭が近づいたある日、佐藤教諭が放課後の合唱練習の様子を見に行っていたところ、両隣のクラスから大きな合唱の音が響く中で、田中教諭のクラスだけはふざけたりしゃべったりするばかりで練習になっていなかった。植村教諭はその場で一喝し、練習を中止させ、指揮者とパートリーダーだけを残して今後の練習のあり方について話し合い、担任に報告するように指示をした。

問1. 上記の事例を読んで、どのようなことに気づきましたか。様々な立場に立ち、認められるべき点と問題点の両面について意見を出し合いましょう。

問2. この事態を変えていく上で、佐藤教諭にできることはどんなことがあるでしょうか。また、この事態を変えていく上で、学年や学校等ができるのはどのようなことでしょうか。関係する人物や分掌、あるいは場面などを想定して、より具体的に考えてみましょう。

問3. 今回の事例を踏まえて、自校で取り組めることはどのようなことでしょうか。また、あなた自身に取り組めることはどのようなことでしょうか。

### チーム—中—③「研究主任としてのリーダーシップの取り方に悩む山川教諭」

(研究分野)

山川ゆみ教諭は学年3クラスの中規模校で研究主任をしている。昨年度の研究のまとめを受け、今年度の学校研究テーマを「基礎的・基本的な知識の定着を図り、表現力を高める指導法の工夫」とし、授業の中で言語活動を活発化させることを、全教科共通のねらいとした。

4月の校内研修において、全教科全員が1度は授業を公開することとし、1学期に3年部の教員から順に授業公開を開始した。その際指導案の作成は簡略化し、本時案の簡単な流れのみを示すこととした。

6月に2人の先生の授業公開を終えた後に、それぞれの教科によって「言語活動」のとらえ方が曖昧であることが指摘され、改めて校内研修で共通理解を図った。この間、公開授業の進捗が遅れたため、3年部の2人の教員の公開授業は2学期以降に延期することになった。

2学期に入り、体育大会や修学旅行、文化祭などの学校行事が増え、公開授業の進捗はますます滞るようになった。また、学校外の各教科の任意団体による指定研究を抱える教員もあり、必ずしも校内研究のテーマに沿った公開授業にはなっていない場合も見られた。

3学期を終えたとき、授業公開を行った教員は結局12人中6人とどまった。また、「言語活動」のとらえ方が曖昧であることや、表現力の高まりを客観的に判断できる規準がないことなどが課題として残り、研究としては深まりに欠けるものとなった。

問1. 上記の事例を読んで、どのようなことに気づきましたか。様々な立場に立ち、認められるべき点と問題点の両面について意見を出し合ひましょう。

問2. この事態を変えていく上で、山川教諭にできることはどんなことがあるでしょうか。また、この事態を変えていく上で、学年や学校等ができるのはどのようなことでしょうか。関係する人物や分掌、あるいは場面などを想定して、より具体的に考えてみましょう。

問3. 今回の事例を踏まえて、自校で取り組めることはどのようなことでしょうか。また、あなた自身が取り組めることはどのようなことでしょうか。

## スクール—中—① 「職員の危機管理に対する意識の甘さに悩む鈴木校長」

(危機管理)

鈴木げんた校長は県の中核市の職員数36人の大規模中学校の校長である。ここ数ヶ月、市では市職員や教職員の飲酒運転等の不祥事が連続しており、市全体の公務員に対し、緊急に綱紀の粛正が求められていた。

鈴木校長は水曜午後の職員会議の際に教職員全員に訓話を行うとともに、全員に飲酒運転等を絶対に行わない誓約書と、不祥事防止を目的とした1人1句の標語作成を週末までに提出するように命じた。

職員会議の間では特に異議は出なかったが、会議終了後に幾人かの教諭が「誓約書や標語等の取組で意味はあるのか」等と笑いながら話しているのを聞いた。

金曜日の放課後、鈴木校長は教頭に誓約書と標語の提出状況を確認した。すると、ほとんどの教員は既に提出していたが、寺川しんじ教諭をはじめ、数人の若い教員が未提出とのことだった。寺川教諭は教職10年目の若手教員のリーダー的存在であり、運動部の顧問をしていた。他の教員も皆運動部の顧問であり、週末に行われる新人戦の準備のため、多忙に紛れて忘れていたのだろうと考え、週明けに改めて督促しようと考えた。

日曜日の夜遅く、藤川校長の自宅に運動部顧問の若い教員の一人から連絡が入った。寺川教諭と数人の運動部顧問が新人戦の打ち上げを行った後、寺川教諭が帰宅途中で自家用車を運転し、飲酒運転で警察に検挙されたいとのことであった。

問1. 上記の事例を読んで、どのようなことに気づきましたか。様々な立場に立ち、認められるべき点と問題点の両面について意見を出し合ひましょう。

問2. このような事態を避けるために、鈴木校長にできたであろうことはどんなことがあるのでしょうか。このような事態を避けるために、組織として学校が取り組めるのはどのようなことでしょうか。関係する人物や分掌、あるいは場面などを想定して、より具体的に考えてみましょう。

問3. 今回の事例を踏まえて、自校で取り組めることはどのようなことでしょうか。また、あなた自身に取り組めることはどのようなことでしょうか。

## スクール—中—② 「携帯電話盗難事件の対応に苦慮する山本校長」(危機管理)

山本ゆり校長は市内の中規模校、夕日ヶ丘中学校の校長である。夕日ヶ丘中では生徒の携帯電話の学校持ち込みは厳しく禁止していた。しかし6月のある日、生徒の持ってきた携帯電話が校内で盗まれるという事件が起こった。

当該の保護者からは、「きまりは知っているが、放課後の塾や習い事の送り迎えの連絡のために子どもに携帯を持たせていた。携帯の中にはプライバシーが満載である。学校の責任において、一刻も早く犯人を特定し、携帯電話を発見してほしい。それができない場合、学校に携帯電話の補償を要求する。」とのことであった。

緊急に開かれた職員会議では、「携帯を持って来ている生徒が何人かいることは感じていたが、そもそも規則を守っていない生徒と保護者の問題である。学校が責任を負う必要はない。」「校内で起きた窃盗である以上、厳しく調査と指導が必要。」「これを機会に、携帯の持ち込みは許可した上で、マナーや正しい使い方を指導すべき」等、様々な意見が出された。

翌日、全校生徒への聞き取り調査を行った上で一斉指導を行い、携帯電話の持ち込み禁止について再確認した。規則の改正は、校長判断で、時期尚早として見送った。

その日の放課後、盗まれた携帯電話は体育館の裏で壊れた状態で発見されたが、犯人は特定できないままであった。当該の保護者は警察による調査と、学校による携帯電話の補償を要求しているが…。

問1. 上記の事例を読んで、どのようなことに気づきましたか。様々な立場に立ち、認められるべき点と問題点の両面について意見を出し合みましょう。

問2. このような事態を避けるために、山本校長にできたであろうことはどんなことがあるのでしょうか。また、このような事態を避けるために、組織として学校が取り組めるのはどのようなことでしょうか。関係する人物や分掌、あるいは場面などを想定して、より具体的に考えてみましょう。

問3. 今回の事例を踏まえて、自校で取り組めることはどのようなことでしょうか。また、あなた自身に取り組めることはどのようなことでしょうか。

スクール—中—③ 「PTAによる学校支援の在り方に苦慮するだんのはる中学校」  
(PTA対応)

市内の中規模校、だんのはる中学校では、毎年秋にキャリア教育の一環として、保護者の中から様々な職業の人をゲストティーチャーとして学校に招き、働くことの喜びや苦労について生徒に話してもらっている。全校生徒対象の講演会形式ではなく、興味のある生徒が集まって小グループを作り、その中にゲストティーチャーが入って懇談するという形式で、生徒には好評であったが、ゲストティーチャーの数を確保するのは一苦労であった。

ゲストティーチャーの選定や連絡・調整は、加藤けんじ教頭、キャリア教育担当の高木こうじ教諭、PTA担当の森えりこ教諭が、PTAの研修部長と連絡を取りながら行っていた。

しかし今年の5月、PTA研修部長から教頭に電話があり、「毎年10人以上の保護者をゲストティーチャーとして確保するのは大変難しい。また、いつも協力する人とそうでない人がいるため保護者の間に不公平感が広がっている。PTA会員以外にも地域の商工会に依頼したり、地域外の人材バンクなどを利用してはどうか。」と提案してきた。

高木教諭は「職業の幅が広がっていいんじゃないですか」と言うが、森教諭は「単に職業人というだけではなく、保護者と語り合うところにも意義があると思うのですが」と言っている。

問1. 上記の事例を読んで、どのようなことに気づきましたか。様々な立場に立ち、認められるべき点と問題点の両面について意見を出し合ひましょう。

問2. この事態を変えていく上で、加藤教頭にできることはどんなことがあるでしょうか。また、この事態を変えていく上で、組織として学校が取り組めるのはどのようなことでしょうか。関係する人物や分掌、あるいは場面などを想定して、より具体的に考えてみましょう。

問3. 今回の事例を踏まえて、自校で取り組めることはどのようなことでしょうか。また、あなた自身に取り組めることはどのようなことでしょうか。